

商売人探偵

土井マスターの事件簿



商売物語ライター
眞喜屋実行（まぎやさねゆき）

「うわあ、これ面白いね～。メニューブックは印刷なんだけど、スタッフさんが手作りシールを貼ってコメントしてる。こういうひと手間がお客様の心を近づけるんですよ。ねえ、社長」

土井繁盛（どいしげもり）は、メニューを一通り見終わると、自分にアイスコーヒーを、息子にマンゴージュースを注文した。

「探偵さん、すみませんお休みの日に」

「うん。本当は今日はお休みなんだけどねえ。息子がどうしてもって言うもんだからさあ」

繁盛のとなりでジュースをすする少年が土井龍（どいりゅう）、繁盛の長男である。

「で、今日はどんなご相談で……」

繁盛は、軽く腰をかけなおした。依頼人の話は片耳で聴きながら、店内をキョロキョロと見回している。他にもなにか使えそうなネタがないか探しているのだ。新しい店に入ったら必ずこれを行う。繁盛なりの流儀らしい。社内だと具合が悪いと依頼人が言うので、相談は依頼人の事務所近くのカフェで受けていた。はじめてのお店に入れたので、繁盛は嬉しそうだ。

「お恥ずかしいのですが、うちのお店で不正が行われているようなんです」

「ん、不正とは。なんかイヤな感じだねえ」

「うちの系列で一番売上のいい戸塚山のお店なんですけど、どうもそこが怪しくて…」

依頼人の社長が話し始めると、繁盛はぐっと顔を寄せた。「不正」という言葉に引っかかったらしい。繁盛も喫茶店を経営している身、商売ポリシーに反することについては敏感になる。

「どうもポイントカードの不正があるようなんです。あ、不正といっても、法律に違反している訳ではないんです。社内のルールに違反している可能性があるということにして、社内のこととはいえ、ルールの違反は、組織の乱れにつながりますし、許せることではありません」

「うん、具体的には――」繁盛は、汗のにじんだ顔をさらに寄せる。

「戸塚山店だけ、ポイントカードの達成率が異常に高いんです。達成というのは、ポイントカードにハンコが十ポイントたまることです。うちでは十ポイント貯めたお客さまに丸一日の利用券をプレゼントしているんです」

「うんうん。じゃあ社長は、戸塚山店では、本来よりも多くのポイントがバラまかれていると思

っているわけだ。店長が不正をしてお客さまの人気取りをしていると」

「そう睨んでいます。うちでは金額でのポイントではなく、来店ポイントだけにしているんです。一回来店してくれたら一ポイント。それだけ、そういう決まりです」

「うんうん、なるほどですねえ。水野さんが犯人だと。でも社長、一番売上のあるお店ならポイントカードが早く貯まるのは普通なんじゃない？お客さまに支持をされているからこそ、売り上げが高いのでしょうに」

繁盛は、額に汗をにじませながら言う。ようやく事件の方に頭が集中してきたようだ。

「本当にそれならいいんですけどね。ペースが異常なんですよ。仮に、毎日来店してくれたとしても一週間で七ポイントですよ。うちはマンガ喫茶ですから、そもそもお客さまが毎日来てくれるなんてことも、そうそう考えられるもんじゃありません。それなのに、十ポイントが一週間で貯まっているんです」

「うんうん、そうきましたかあ。やはり社長は水野さんが犯人だと...」

「え、水野さん...？」

「ん、こっちの話ね」

繁盛はニヤニヤと嬉しそうに顔をゆるませ、何度も「なるほど」と繰り返した。

「分かったよ、社長！ピンと来た！今回の件は不正でも水野さんの仕業でもないよ〜。ぼくも商売人だからねえ、ピンとくるのよ。こういったことはすぐにね」

繁盛は、自信満々に話し出す。

「うわ、今日も出た」龍が右手で顔を抑える。繁盛がちよっと話を聞いただけで推理を完成させたがるのはいつものことだ。

「社長、今回の件はとっても簡単だよ。社長が想像しているような水野さん事件じゃないよ、安心して」

「水野さん事件.....。さっきから『水野』って誰なんですか？うちには水野という人間はいませんけど」

「まあまあ、もう水野さんは出る幕もないですから」

繁盛は、ふんつと鼻息を荒く飛ばして立ち上がり、自信満々に宣言した。

「社長、今回の事件の真相はこれです！ポイント二倍Day！雨の日サービスとか、レディースDayとか、ダンディーズDayとか、メガネーズDayとか、チョッキDayとか、奥さんにビンタされた

痕Dayとか、考えればいくらでもあるでしょう。そういう企画を独自に行なっているんです、戸塚山店では。だから、ポイントが貯まるのが早い。そういうことしょう」

繁盛の推理を聞いたが、依頼人の表情は晴れない。

「いえ、うちではポイント二倍は禁止しているんです」

「じゃあ三倍」

「それもダメ。私も、もしやと思って店長に確認してみたのですが、やってないと言っていました」

「あら、そうなの...」

「正直、その言葉を信用しきれしていないのもあるのですが...」

繁盛は一気に勢いをなくして座り込んだ。あてが外れると子供のように落ち込むのもいつものことだ。

「基本的に、私が割引とか、ポイント増量とかが好きではないので...」

「え、割引が好きじゃない？」

「あ、はい。どうもね...なんか簡単に割引とかポイント増量をするのは、なんだか逃げているような気がして.....」

「.....社長、それ、すご〜くよくわかります」

繁盛は、依頼人の手を取り、がっしりと握った。

「もう最近は、どこのお店でも割引が当たり前になってますもんねえ。そんなに自分のお店に自信がないのかってさああ、割引しないとお客さまは来てくれないような風潮がありますもんね。もうたまらんですよねえ〜」

目をキラキラさせて同意する繁盛。激しい鼻息が、依頼人の前髪を揺らす。

「父ちゃんのお店だって、割引してんじゃん」龍が口をはさんだ。

「しっ！ 聞こえる。しかたないじゃん。そうしないとお客さん来てくれないんだから.....」繁盛は、息子だけに聞こえるように声をひそめた。

「あ、社長。ジュースお代わりもらってもいいですか？ この子、もう飲んじやったみたいで」

「もう」龍はしかたなく、口を閉じておとなしくジュースを待った。

「話を戻しますが、今回は戸塚山店で不正が行われていないかを調査していただきたいんです。私が行ったところで、私の目の前でするわけがありませんからね。隠れてこそこそやってるのが許せないんですよ」

「なるほど、そこでぼくの出番ということですねえ」

「ええ、土井さんは商売に関する調査にかけては一流だと伺ってまして……」

「……え、なんですか？」

「商売に関する調査にかけては、一流だと」

「ん～、商売に関しては、なんと？」

「……一流」

ごほん。繁盛の顔がみるみるうちに緩んだ。

「社長、今回の『水野増子パラマキ事件』きっと解決しましょう」

「ただ…」 龍は、呆れたように手をあげた。

「父ちゃん、早くいこうよ！ 不正事件なんですよ？」

龍は、カフェを出るとたまっていた物を出すように話し出した。依頼人の前では普通の小学生を装う必要があるから、あまり口出しができない。その時間は、うずうずして仕方がなくなる。

土井龍。商売人探偵である土井繁盛の長男である。シャーロック・ホームズに憧れるのは名探偵コナン、心は高校二年生、体は小学一年生。その名探偵コナンに憧れるのが土井龍（どいりゆう）、心も体も小学五年生。憧れのコナン君に影響された大きめのメガネがチャームポイント。実際の目は2.0、メガネは伊達である。もう小学五年生なのに、「コナン君はこうだから」といって、入学式で着た紺のブレザーと短パン、赤い蝶ネクタイを好んで着けている。これが探偵としてのユニホームだ。もちろん四年も前の服はピッチピチで、ズボンの裾からでたモモは、ボンレスハムのようにパンパンになっている。

「ううん。社長は水野増子さんが犯人だと思ってるけど、だぶん違うよ。龍ちゃんが望むような事件なんて、この街じゃそうそう起きないって～」

「そんなの行ってみなきゃ分からないじゃん。実は凶悪犯なのかもしれないし」

龍は繁盛の手を引っ張った。

龍は、コナン君が巻き込まれるような難解な殺人事件に憧れている『名探偵コナン』と『金田一少年の事件簿』は、何度も読み返したし、どんな事件に遭遇しても、推理して解決する自信は

ある。準備は出来ているのに、肝心の事件が起きてくれないのが不満だ。

繁盛が探偵を始めたのは、龍がきっかけだった。昔、繁盛が好んで読んでいたコナンのマンガが家の押入れのダンボールに残っていて、「断捨離」のブームに乗って片付けをはじめたときに、それを龍が見つけて読み出した。一気に引き込まれた龍は、探偵にあこがれ、繁盛が経営する喫茶店の裏口に、『土井探偵事務所』という手書きの看板を貼った。たまたまそれを見たオカマバ一のママが、お客さまの浮気調査の相談を持ちかけてきた。繁盛は何のことかわからないまま、持ち前のホスピタリティで手助けをすると、偶然にも問題が解決してしまい、その一件で、この商店街の中で繁盛の名声が高まってしまったのである。

褒められて上機嫌になった繁盛が、元々は気の進まなかった「探偵事務所」の看板を掲げることを許したのだ。あくまでも本業の喫茶店に影響が出ない範囲ということと、商売に関するということ条件がついたけれど。

「結局引き受けちゃったね、父ちゃん。依頼の電話がかかって来たときは、来るのも嫌がってたのにねえ」

「そうだよお。龍ちゃんがやりたいって言うからだろ？ 父ちゃんは本当はデパートにでも行って商売のネタを集めたかったのになあ〜」

「でも、最後はやる気になってたじゃない」

「まあねえ、社長も困っていたしねえ。何とかしてあげたくなるよねえ」

困っている人を見ると、助けないと気が済まないのが繁盛の性分だ。自分でもそれが分かっているから、繁盛は人の相談を聞くのが好きじゃないらしい。

二人は、その足で駅に向かい、戸塚山方面の電車に乗った。

「へえ、映画もやってるんだね。マンガ喫茶なのにねえ」

店の前の貼紙を見て、繁盛は感心していた。「これは使えるぞ」とひとりでブツブツと言いながらメモ帳になにやら書き込む。

「父ちゃん。こんなのはもう当たり前だよ。最近のマンキツはパソコンも一人一台ずつあるし、DVDだって見られるんだ」

「へえ個室かあ。部屋が一人ずつあるなんて豪華だねえ。父ちゃんが若い頃は、マンガ喫茶といったら相席も当たり前だったけどなあ...」

マンガ喫茶ランボー。タテハマ市内に、十数店舗を構えるマンガ喫茶。市内ではそこそこの存在感がある。ただ、店内に入ると、その雰囲気は龍が抱いていたものとはかなり違っていた。

「お二人さま、ご一緒の席にさせていただきますでしょうか？」

なんだか妙に笑顔の気持ちいい男が話しかけてくる。こいつが不正を働いている店長か。

こんな気持ちいい笑顔の裏に、悪い顔があるとは。

となりで、繁盛が店長の顔をのぞき込む。顔を至近距離に近づけて舐めまわすように見る。本人に悪気はないが、汗をダラダラと書いた小太りのおっさんが目をキラキラさせて見つめてくれば、どんな根性主だって耐えられない。男は少しのけぞった。

「あの.....、お二人さまはご一緒に.....」

「あ、別々でお願いします」龍が繁盛のかわりに答える。

繁盛は「うん、別々で」と繰り返そうとして止まる。「別々って、まさか、ひとりでえっちなマンガを読む気じゃ...」

「父ちゃん、あれ」龍があきれたように店内を指さす。

店内は、今どきの個室中心のネットカフェではない。繁盛の言う昔ながらのマンガ喫茶という方がイメージに合うだろう。個室もあるようだが、ペア用が一室とVIPルームという扱いのひとり用個室が一室のみ。一般席はいわゆるオープン席で、個室ではない。広めの空間の両壁沿いにカウンターテーブルが二列と、空間の中心には島の形に大きめのテーブル。そこに椅子が置いてあり、簡単な間仕切りがされている。そのどこにでも座っていいという仕組みになっていた。店の奥川の壁は、白くきれいに手入れされていて、床は学校の教室のような木のマスが敷き詰められている。明るいその空間は、近代的な感じこそしないが、優しい雰囲気があった。

「龍ちゃん。なかなかのチャレンジャーだねえ。この席じゃあ父ちゃんはえっちな本は無理だあ」

「ちがうよ……」龍はあきれ。繁盛はだいたいいつもこんな調子だ。

繁盛と離れて席に座ろうとする龍。息子の下心を見届けるのも親の役目だとつけ回す繁盛。

「別の角度から見た方がいいだろ？」

「別の角度ってなんだよお。写真とマンガはねえ、下から覗いたって見えないんだぞ！ やっぱりまだ小学……」

「父ちゃん！ 今日は何でここに来てるのさ！！」

龍が小声で叱ると、繁盛は、はっとわれに返ったようにせき払いした。

「うん。まあ龍ちゃんの言うことも一理あるねえ」

繁盛は、龍から通路を挟んでナナメ後ろの席に移動した。「いい漫画教えてやろうか？父ちゃんが中学生の時に興奮したやつ」とどうでもいい情報をチラつかれながら。繁盛はだいたいいつもこんな調子だ。

まずは怪しまれないように、普通にマンガを読む。龍は『金田一少年』の読み切り単行本をチョイス。コナン君だと没頭してしまい、止まらなくなってしまうのが分かっているからだ。

「龍ちゃん」呼ぶ声がする。振り向くと、繁盛が目をキラキラさせてメニューブックを持っていた。商売で使えるネタを見つけた時の目だ。「このメニュー見てよお。ただのアイスコーヒーじゃないよ。『富士山の湧き水で水出ししたアイスコーヒー』だって。これは飲んでみたくなるねえ。すごいなあ」繁盛は感心しきっている。「ここの店長はきっといい商売人なんだろうなあ」

そんな繁盛を無視して、マンガに目を向け二巻分を読み終わると、入店して四十分ほど経っていた。そろそろいい頃だろう。龍は父に目配せをする。

が、その先にいる父は、繁盛は真剣だった。

食い入るようにコナン君の単行本を読んでいる。左側には、一～九巻が、右側には十一～二十巻が積まれている。目の前には「おひとりさま十冊まで」の貼り紙。龍の目配せにはまったく気づかない。時おりニヤついたり真剣になったりと、すっかりコナン君の世界に入り込んでいる。

「父ちゃん…」静かな店内、龍は小さな声で父を呼ぶが、繁盛はまったく動じない。一心不乱

にページをめくっている。そのペースは相当早い。龍が指を伸ばしてこぶくと、繁盛はこちらを向くこともなく龍の手を振り払う。「もう、何をしに来たんだよ。父ちゃんは…」

しかたなく立ち上がり、龍が繁盛の耳元でささやくと、繁盛はブルブルと首を振った。「と、父ちゃんは、ばっちくなんかないぞお、バッチリだ。バッチグーだあ！」そして、人差し指と親指で輪っかをつくる。バッチグーのポーズだ。

「ん、龍ちゃん。どうしたの？」

「もう、どうしたじゃないよ」

「いやあ、コナン君ておもしろいねえ。久しぶりに読んだら入り込んじゃったよ。あ、でもこの事件まだ解決してない——」

入り込んでるばあいじゃない。龍は繁盛からコナンの漫画を取り上げ、代わりに『すごいよマサルさん』を与えた。また没頭されたらたまったもんじゃない。一話読み切りの方がいいだろう。

二人は漫画を読む体制を取りながら、テーブルの下にペンとメモ帳を構えた。何か店長に不審な動きがあれば、いつでもメモを取れるように。いよいよ店長の犯行を抑えなくてはならない。

それにしても感じのいい店長だ。お客さまにはいつも笑顔で、スタッフにも快活。ひとりで作業をしているときも、キビキビと無駄がない。こんな店長が本当に不正をしているのか。龍は、なんとなく店長がシロであって欲しいと思った。

そして、ひとりのお客さまがレジに向かう。会計して帰るところだろう。ここが不正の現場になる。龍は顔を下に向けながら、目だけをレジに向けた。

ポイントカードを受け取ると、店長はレジ横のケースに手を伸ばす。そして何かを手に取りポンとひと押し。ハンコを押したのだろう。ただ、どう見ても一回だ。二回分のポイントを押しているようには見えなかった。どういうことだ。不正は行われていないのか。

続いて、別のお客さまが帰る。同じだ。店長は一回しかポイントを押していない。やはり店長は不正をしていないのではないか…。龍はなぜかほっとした。しかし疑惑は晴れない。ポイントカードが一週間で十ポイント貯まっているのは事実。むしろその謎は深まってしまった。

そのとき、龍の頭にひとつの仮説が浮かんだ。もしかすると、ポイントを水増ししているのは常連のお客さまだけなのではないか。そう考えると、まだ疑惑は残る。不正の現場には、まだ遭遇していないだけなのだ。

龍は、次のマンガを探すフリをして店内を見回った。二つの個室は入口が空いている。今は使用されていないようだ。店内のお客さまは土井親子を除くと五名。その中で常連の可能性が高いのは三名だ。

ひとりの青年は、ニットキャップをかぶり、ゆったりとした灰色のスウェットを上下に着ている。席についてすぐに連載マンガの二十二～二十八巻を取り出してきていた。前回の続きだろう。少なくとも初めての来店ではない。

ひとりの細い青年は、Gジャンに細めのメガネ。入店すると迷わずに少女マンガコーナーに向かっていった。彼はほぼ間違いなく常連だろう。

もう一人の女性は肩につくくらいの髪で、黄色のハンドバッグが目立つ。店に入るなり店長と楽しそうに話していたことからしておそらく彼女も常連だろう。

他の二名は、常連なのか初めてのお客さまなのかは判断がつかない。だけど、今はそこが問題なのではない。目をつけた常連客が帰る時に、不正の現場を抑えることができればそれでいいのだ。

後ろでした音に反応して振り向くと、少女マンガ青年が立ち上がっていた。彼は一度壁にかかっている時計を見ると、ニヤツとしてテーブルに積んだマンガたちを持ち上げた。帰るのだろうか。青年は、そのマンガを棚へ戻すと、そのままレジへ向かった。レジでは店長が笑顔で迎える。やはり常連客と見て間違いないだろう。

龍は店長の手元をじっと見つめる。ハンコが二回押されるはずだ。しかし、どう見ても一回。不正は見つからない。ほかの二名が帰るまで、さらに二時間ねばったが、結局証拠をつかむことはできなかった。

「ねえ、龍ちゃん」店を出て駅へ向かいながら、繁盛が話しかけてくる。「さっきの青年覚えてる？」

さっきの青年、あの少女マンガの青年のことだろう。

「彼さあ。多分新記録出したんだよね。時計見て喜んでたもんね店長と」

「新記録？」

「うん、一時間で何冊読めるかって。すごいよ彼。一時間で帰っちゃったけど、その間に十五冊も読んでたもんね。一冊あたり四分の計算。父ちゃんも対抗してみたけど勝てなかったなあ。マンガの利用料は一時間三百円だから、一冊あたり二十円だよ。いやコーヒー代を二百円と考えると漫画代は百円だよ。そうすると、一冊六、六六...円かあ。お得だなあ」

繁盛は、何を見ても商売やお金に結びつけようとする。こういうところの洞察力だけは鋭い。この力を調査の方にもむけて欲しいと龍はいつも思う。

「それよりどうしよう。店長が不正をしている証拠は見つけられなかったよ」

「うん。父ちゃんも」繁盛は右手の親指と人差し指で輪っかをつくる。
バッチグーのポーズだ。

証拠は何も見つかっていない。探偵として依頼を受けたのに、何もわかっていない。どこがバッチグーだ。

「うん。いいの。だって今日はいっぱい収穫があったもん。うちでも使えそうなネタがあったなあ。よかったあ。あのお店、父ちゃんは好きだなあ」

繁盛は商売のことばかりを考えている。今日はそんなことを見に行っただけじゃない...。いいのだろうか依頼のことは。

「依頼は...、どうするの？」

「あれ？ まだ分からないの？ それじゃあ一流の商売人にはなれないなあ」

コナン君に没頭してろくに見ていなかったくせに、龍は口をふくらませる。別に一流の商売人になりたいわけじゃない。一流の探偵になりたいんだ。

「父ちゃんは分かったよお」

「え」

ろくに見ていなかったのに、わかるはずがない。第一、不正の証拠は見えなかったって、今言ったばかりじゃないか。

「うん。あの店長はいいひと。不正なんかしてないよ。むしろ、すごくいい商売人だねえ。父ちゃん勉強になったもん。だから、あのお店は一週間で十ポイント貯まるんだよねえ」

意味がわからない。龍は、ひとつだけ頭にあった可能性を口にした。

「もしかして、三ポイント分を先に押してあるとか・・・」

「龍ちゃん、それはいいアイデアだ！グーだよ」繁盛は、右手でまたあの形をつくる。

「そのアイデアは商売としては面白いよ。ゴールが近い方が、お客さまはなんとか達成したくなるしねえ。あと、やり方によっては特別感を感じてもらうこともできる。常連さんだけとか、前に達成した人だけに先にポイントを押して上げるとかね。うんうん、いいアイデアだ。その調子」

だから、今は商売の話じゃない！

「でもね、そのアイデアは、この会社の中ではルール違反なんだよ。社長はそういうのも嫌いみたいだから。もしそれをやったら、この会社では不正みたいなんだよね。父ちゃんはアリだとおもうけどねえ」

「うん...じゃあどうということ.....？」

「わからない？」

フフフーフ、フフフーフーフフ♪

繁盛の鼻歌がコナン君のテーマを奏で始めた。この曲がかかるのは、繁盛が推理時自信のある時だ。解決は近い。

(つづく)

「ちょっと時間あるから、ラーメンでも食べてからまた夜の九時前にこようかねえ。駅前に美味しそうなラーメン屋があったんだよお」

早く教えて欲しいのに…。繁盛は食べ物のことを考えるともうほかのことは考えられない。聞いても無駄なことは息子だからこそよく分かっている。龍はしかたなく繁盛についていった。

「ねえ、父ちゃん。わかったってどういうこと？」

ラーメンを食べ終わり、龍は父に聞く。繁盛はニヤニヤとつまようじを動かしている。

「美味しかったねえ、ここのラーメン。で、龍ちゃんは見つけたの？」

「……何を？」

「このお店のいいところに決まってるでしょ？ お店に入ったらいかなる時でも商売のネタを探していなさいって言ってるでしょう」

たしかに言われているけど、どうもそこには夢中になれない。そんなことよりもランボーの不正事件の方が今はずっと大事だと思う。

二十時四十五分。二人はランボー戸塚山店から道を挟んで向かい側に立っていた。

「ここで何を見るのさ。店長が出てくるの？ もうお客さんなんて来ないよ」

この時間になると、道の往来はごく少ない。メイン通りから一本入ったこの道には、ほとんど人は通らない。周りのお店もすでに全部閉まっている。このあたりに見える明かりは、ランボーの入口の明かりと、近くのビルの事務所に残っている数件くらいなものだ。これから来店するお客さんなんていないように思われた。

そこで五分ほど待つと、Gジャンとメガネの青年が現れた。先ほどの少女マンガ青年だ。「あ」思わず声が出そうになり、龍は口を抑えた。すると、似たような格好をした青年たちが続々とランボーの中に入っていく。ランボーの入口には、すでに「CLOSE」の札がかかっていた。

そして、二十一時になるとほぼ同時に、店内の明かりも消えた。

一体、ランボーの中で何が行われているのか。もしかすると予想していたよりもずっとマズイことが起きているのかもしれない。龍のほほを嫌な汗が流れた。

しかし繁盛は、「うんうん」と納得の表情。「あの店長、やっぱりやるなあ」
「なに言ってんだよ父ちゃん！ 中で何か不正行為が行われてるんじゃないか！」
「あせらないあせらない。水野さんはいないよ」
「水野さんて誰！そんな人知らないよ。何かやってんだよ、あの中で！」
「うんやってる。きっと、楽しいことをね」
「なにのんきなことを...」
「うん、映画をね」
「映画？」
「そう、さっき貼り紙見たでしょ？今日は『キューティーハニー』だってさ」
「.....え？」
「だからさ、今日は少女マンガアニメの映画鑑賞会なんだよ。明日はアクションみたいね。『ついに、あのランボーが』だって書いてあったよ」

龍には、繁盛の言っていることがわからない。

「どういうこと？不正は？ポイントの水増しは？」
「だからあ。水野さんはいないんだよ。水野増子さんなんてさ。龍ちゃんもも見たでしょ？いい店長だよ、あの人は。超まっとう。あの店長はきっと、この時間帯にはフリーのお客さんはやめたんだね。貸切にしているみたい」

水野さんはいない。ポイントの水増しはされていない。いい店長。

「あのお店、個室は少ないじゃん。しかも個室を使うとちょっと値段も高いしね。だから、映画と言っても個室で見る人は少ないんだよ」

だからどうだと言うんだ。

「曜日ごとに、いろんなカテゴリーの映画を上映しているみたいだね。二十一時～二十三時の時間で。個室が少ない代わりに、広いスペースがあるからね。壁は白くてきれいだったでしょ？多分あそこに大画面で映してるんじゃないかなあ、ほら」

ランボーの窓からは、オレンジや青の光がうっすらもれてくる。

「上手だよねえ...。普通ならお客さんが来てくれなければ諦めるしかないでしょ？こんな人通りだったらどうしようもないもん。でも、この店長はそれを逆手にとったんだよね。お客さまが来ないなら貸切っちゃおって。んで趣味の合う人たちを集めて、上映会をしているんだよ。同じ

趣味の仲間が集まれるのは嬉しいからね。彼らにとっても嬉しい機会なんだろうね」

「だから……」

「うん。そうだね。一日に二回来店してれば、来店ポイントだって付くよね。ちゃんと利用料も払ってるんだしさあ。なんの問題もなし！ うまいよね～」

「ということは…不正は？」

「だから、不正なんてなし！ 『水野増子バラマキ事件』は、ただの想像でしたあ。父ちゃんは初めから言ってたでしょ？ あの店長は商売上手。今までになかった新しい利用方法を作り出して、お客さまに提案したんだ。元々ゼロに近かった時間帯を利用してね。ゼロからお客さんを作りだしたんだよ。すごいことだよなあ」

つまらない。コナン君みたいに、もっとワクワク・ゾクゾクする事件はないのだろうか。龍はいつか言いたいと願っている。犯人を追い詰めて「お前は誰だ」と訊かれる。そして言うんだ「俺かい？おれは、土井龍。探偵さ」ってね。その夢はいつか叶うのだろうか。

「でね、これをどうやってうちのお店に活かすかがなんだけどさあ。ただマネしてもダメなんだよ。支点を見つけることが大事なんだよ、支点がさ……」

始まった。また、繁盛の長い商売講義が…。今晚は何時まで続くのだろうか。

(おわり)

[商売人探偵] 土井マスターの事件簿

<http://p.booklog.jp/book/36513>

2011年10月

- 著者 : 株式会社はぴっく
物語ライター 眞喜屋 実行 (まきや さねゆき)
- プロフィール : <http://haps.chu.jp/gaiyou.html>

- 著書 : 『ひたむきな人のお店を助ける 魔法のノート』
(ぱる出版さん 2011年6月) <http://amzn.to/iyJnSe>



ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/33471>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.